

ヒトゲノム編集をめぐる世論

毎日新聞 永山悦子

@日本学術会議公開シンポジウム「ヒト受精卵や配偶子のゲノム編集を考える」

1 過去の受精卵などを使った研究とゲノム編集研究の報道の比較

2 ゲノム編集研究への関心を高める必要性と議論への期待

受精卵に関わる研究に関する報道

- ヒトクローン胚 | クローン人間



- ヒトES細胞



報道の傾向

- 最初は控えめ
 - ↓
- 「ヒトに関わる」さらに「規制を検討(具体的な研究が始まる)」
 - ↓
- 扱いが大きくなる(関心が高まる)
- ゲノム編集はどうか？

- ヒトゲノム編集



- 現状の扱いは「小さい」
- そこに感じる「ヒトクローン胚」や「ヒトES細胞」との温度差

・ヒトクローン胚
・ES細胞

「驚き」
「想像のしやすさ」
「リスクのわかりやすさ」

・ヒトゲノム編集

「慣れ」
「技術の難しさ」
「リスクのわかりにくさ」

ヒトゲノム編集への関心を高める必要性

- 世論の関心が薄い中では、倫理的な問題の公的ルール作りは難しい→世論の後押しに期待
- リスクが分からない怖さ、メリットの不明確さ→継続したチェックが必要
- 患者への心理的な影響→期待してよいのかどうか不明確
- 「遺伝子や生命の萌芽を触る研究」「受精卵を使う研究」=「命の選別につながる研究」(基礎研究の目的)についての包括的なルール作りの必要性→ゲノム編集以外にも同様の問題、縦割りの弊害
- 生命倫理に関するルール作りの必要性→「規制」は研究の障害か、日本で「熟議」は成立するか



2011年1月11日
朝刊

ヒトゲノム編集研究の議論への希望

- なぜ「ヒト」なのか(動物ではだめなのか)
- だれのための研究か(患者のためか研究者のためか)
- 「リスク」及び「現状(限界)」の明示を
- 受精卵と体細胞について、ゲノム編集の課題の比較、明示を